

新潟県・新潟市立高志中等教育学校

主体的な学習意欲の醸成

知識の「活用」を重視した 指導の「質」の改善で、 学びを深める生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 「量」重視の学習指導により、学ぶ意欲や目的意識を持ってない生徒が少なくなかった

実践内容

- 教師間の連携の強化** 中学校籍と高校籍の教師の交流を活性化し、全校を挙げた指導改善への合意形成を推進。「6年間でともに生徒を育てる」という意識の下、全学年で段階的に目標を設定し、宿題などの「量」と「質」を変えていくことにした
- アクティブ・ラーニングの理解と普及** 大学教員を講師とするアクティブ・ラーニング（以下、AL）の研修を定期的に行い、教師の意識改革を徹底。教師は知識・技能の「活用」の重要性を実感し、ALを取り入れた、生徒の考えを深めさせる授業が全学年で行われるようになった
- ルーブリックの策定** 生徒の成長を可視化するため、思考力や主体性などを評価するルーブリックの作成を進めた

成果と展望

- 意欲的に学習する生徒が増加
- ALが定着し、生き生きと学びを深める生徒が増加

PROFILE



市内唯一の中等教育学校として開校。高い志と豊かな知性・人間性、国際感覚を備えたリーダーの育成を目指している。社会に開かれた学校づくりに向け、新潟市の「地域と学校パートナーシップ事業」を継続中。

設立	2008（平成20）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約120人

2018年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道大、山形大、筑波大、千葉大、新潟大、金沢大、札幌医科大、茨城県立医療大、新潟県立大などに60人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立命館大などに延べ133人が合格。

住所	〒950-0926 新潟県新潟市中央区高志1-15-1
電話	025-286-9811
Web site	http://www.kohshichuto.city-niigata.ed.jp

生徒の学習意欲を高めるため、「量」から「質」へ指導の転換を図る

新潟県・新潟市立高志中等教育学校では、主体的な学習集団を形成すべく、2014年度から、指導改善を段階的に推進している。

校名の通り、高い志を抱いた生徒の育成を目指し、旧帝大を始めとする最難関国公立大学の合格者を毎年出すなど、進学実績も好調な同校だが、以前は生徒の学習意欲に課題があった。宿題などの学習の「量」を重視していたが、そうした指導によって学力を伸ばす生徒がいる一方、量を消化しきれず、学習に前向きになれない生徒も少なくなかったという。三林伸広（さんばひろ）教頭は、次のように語る。

「考える面白さに気づけば、生徒は学習が楽しくなり、積極的に取り組めるようになるはずです。そうした生徒を増やす必要があると感じ、学習と指導の『質』の転換を目指しました」

教師間の合意形成を進め、6年間の段階的な指導方針を作成

最初に取り組んだのは、教師間の連携の強化だ。中等教育学校では、一般的に中学校籍の教師が1〜3年生、高校籍の教師が4〜6年生を担当するが、全校を挙げた指導改善を始めるにあたり、両者の交流を活性化して合意形成を進

め、「6年間でともに生徒を育てる」という意識を醸成しようと考えた。

そこで、まずは三林教頭が、両学校籍の教師の相互理解につながるよう、積極的に声をかけた。例えば、保護者とのコミュニケーションを重視するかどうかについて、以前は学校籍による意識の差が見られたため、三林教頭は保護者対応の重要性を全教師の前で語った。

そうして、両者がより交流しやすくなる雰囲気づくりを進める中で、柔軟な学年編成も導入した。学校籍にかかわらず、どの教師も1〜6年生の授業を行うようにするとともに、中学校籍の教師にも、4〜6年生の担任や学年主任を任せることにした。すると次第に、両学校籍の教師は学年運営や指導の仕方などについて日常的に意見を交換し、相談し合うようになった。

全教師のコミュニケーションが緊密になるに従って、6年間を俯瞰した学力形成のイメージも明確になっていった。そして、段階的に目標を設定し、宿題や週末課題などの「量」と「質」を変えていくという方針も固まった。1・2年次では、学習習慣の定着を目的として、以前と同じように各教科担当が定期的に課題を出す。3年次以降は、主体的な学習への意識づけを強化。学年が上がるにつれて教師は指定する課題を減らしていき、その分、生徒には頑張りたい教科・科目に応じて学習内容・量を自分で決めるよう指導する。上野昌弘校長は、こう述べる。

「生徒一人ひとりが自分に合った学習内容・

量を設定できているかどうか、しつかり把握したいと思います。そうすれば、改善点のフールドバックを始めとする個別指導に生かせるでしょう。生徒がきちんと自己調整できるように、後押ししていきたいと考えています」

「知識を活用して考える問い」への教師の意識づけを徹底

次に力を入れたのは、知識・技能の「量」よりも「活用」を重視する指導への転換だ。そこで、15年度、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の研究に取り組み始めた。

当時は、ALについて盛んに語られるようになって間もない頃であり、同校でもALを表面的にしか理解していない教師が少なくなかった。例えば、生徒同士で話し合いをしたり、特定の思考ツールを使ったりすれば、ALになると考えている教師もいたという。そこで、まずは、教師の理解を深めることを最重要課題と位置づけ、16年2月、コミュニケーション教育に詳しい星椋大学の北川達夫客員教授による研修を行った。北川教授からは、東京大学の個別学力検査における英語の問題とその採点方法などが紹介され、今後は他の国公立大学の入試でも思考力・判断力・表現力がより重視されるようになるだろうという予測が示された。

9月には、再び北川教授による授業研究が行われ、具体的にどのように授業を変えていくべきかを学んだ。北川教授は、生徒が正解を出す



新潟県・新潟市立高志中等教育学校校長
上野昌弘 うえの・まさひろ
教職歴35年。同校に赴任して1年目。「よく遊び、よく学べ。学校は子どもにも教師にも学ぶ喜びに満ちた場所でないといけない」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校教頭
三林伸広 さんばやし・のぶひろ
教職歴30年。同校に赴任して4年目。「プロフェッショナルである以上、複雑なことをシンプルにできないならならぬ」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校
田中裕久 たなか・ひろひさ
教職歴16年。同校に赴任して3年目。進路指導主事。「学びに『楽しさ』はあれども『楽』はなし」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校
伊丹 優 いたみ・すくむ
教職歴7年。同校に赴任して2年目。研究主任。「がむしゃら」の精神を大切にして挑戦を続け、何事にもベストを尽くしていきたい」

だけではなく、なぜかを考えたり、別解はないのかを探ったりするような「生徒が自分の知識を活用して考える問い」を立てることの重要性を強調した。また、発問の仕方をどのように変えるべきなのか、教師一人ひとりが検討してほしいと呼びかけた。

そうして学校全体でA Lの本質と必要性への共通理解が深まっていき、当初は戸惑っていた教師も、次第に指導改善に前向きになっていった。田中裕久先生は次のように思いを述べる。

「以前はA Lの導入を自分事として考えられなかったのですが、北川先生の話や聞き知識の『活用』が切実な課題になっていると実感しました。思考力の捉え方も教科・科目によって違いがあることを知り、自分が担当する化学の授業では何をすべきなのか、何ができるのか、考えるようになりました」

意欲的に学ぶ生徒の姿が、指導改善をさらに推進させる

17年度になると、授業に意識的にA Lを取り入れる教師が増えていった。田中先生もその1人であり、1学期の前半には、「浸透圧を社会でどのように生かすのか」というテーマを設定し、話し合いを中心とした探究型の授業を行った。すると、「水位の差を利用して発電に用いる」といった物理の学習内容を活用したアイデアを出すグループが出るなど、予想以上に考えを深めていた生徒が目立ったという。三林教頭は、

写真1 6年生の「世界史B」の授業では、世界各国の経済格差が生じる要因を考えた。生徒間で活発に意見交換が行われ、地理的な要因や独立した時期といった様々な角度から分析・推測する姿が見られた。

*写真は、2点とも17年度の公開授業の様子

次のように振り返る。

「田中先生から聞いた生徒の意欲的な様子もよく覚えていますが、それを説明している田中先生の表情の輝きが忘れられません。生徒の変化を実感できれば、教師の意欲はさらに高まるでしょう。指導改善が着実に前進し

写真2 枝豆の作付面積が日本一である新潟県は、なぜ出荷額では7位なのか、統計データを読み取りながら考えた4年生の「数学I」の授業。グループごとに話し合う中で、生徒一人ひとりが自分の考えを深めていったという。

ていくと思いました」

夏季休業中には、北川教授の指導により、高学籍の全教師が思考力の求められる問題に取り組み、「思考力とはどのようなものか」というイメージを共有。そして2学期には、4〜6学年でA Lを取り入れた公開授業を行った(写真1・2)。例えば、地理歴史科では、「地勢的に経済格差の要因を探る」という問いを設定した。すると、知的好奇心を刺激され、目を輝かせて取り組む生徒が少なくなかったという。

生徒がさらに成長できるよう、自分の変化の客観的把握を促す

18年度には、主体的な学習意欲のさらなる向上を目指し、生徒一人ひとりの成長の「見える化」に力を入れている。現在は、次期学習指導要領に示された育成すべき資質・能力の3つの柱を中心とした、評価方法の改善を推進中だ。

思考力の客観的な把握に向けては、ベネッセの「GPS Academic (*1)」（以下、GPS）の活用を始めた。1〜3年次には、以前からベネッセの「中学総合学力調査(*2)」で思考力を測定していたが、4年次以降の測定が課題となっていた。そこで、18年度からは、4・5年次にGPSを導入し、5年間の推移を把握できるようにした。さらに、各教科・科目の思考力の深まりを把握しようと考え、GPSを参考にしながら、ルーブリックの作成も進めている。主体性の評価については、文部科学省の発信

*1 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。
*2 ベネッセの教材の1つで、「教科の思考力、判断力・表現力」を測定し、段階別評価を行うテスト。

資料を分析したり、大学のアドミッシン・ポリシーやディプロマ・ポリシーから主体性にかかわる内容を抽出したりして、研究を重ねた。そうして、まず完成させたのが、体育祭のルーブリックだ(図)。「計画性・主体性」「表現・協働」といった4項目から成り、生徒が体育祭での行動を振り返り、それぞれ4段階で自己評価を行う。今後は、ほかの行事や部活動などの課外活動でもルーブリックを作成し、内容を精緻にしていく。

「行事や課外活動が『楽しかった』という

図 体育祭のルーブリック

1 ルーブリック (自分で該当する箇所には○をつけましょう)

	計画性・主体性	表現・協働
S	自分の将来や他者の発展を見据えて、明確な目的意識を持って活動を計画し、実行した。	問題解決に主体的に参画し、他者に働きかけ、アイデアを提案させながら合意形成ができた。
A	目的意識を持って活動を計画し、実行した。	問題解決に参画し、他者とアイデアを出しながら合意形成をした。
B	自ら活動を計画し、実行した。	問題解決の実行者を支援する立場で合意形成をした。

「自分の将来や他者の発展を見据えて、明確な目的意識を持って活動を計画し、実行」といった、自分を周囲とのかかわりの中で捉え直す項目が目立つ。文章を書いて振り返る欄も設けられている。

*学校資料を基に編集部が一部改編

た感想だけで終わらないよう、自分の変化を客観的に把握する指標が必要だと考えました。また、他者を気遣ったり、感謝する気持ちを持ったりするようになることも、精神的な成長です。そこで、主体性のルーブリックでは、周囲とのかかわりの中で自己理解を深められるよう工夫しました(三林教頭)

各教科・科目でも、ルーブリックによる評価を進めている。田中先生は、主体性や表現力、傾聴力といった各観点を4段階で評価するルーブリックを作り、実験の授業で活用中だ。そうして、多面的な見方・考え方や批判的な思考力をさらに高めていきたいと考えている。

上野校長は、ルーブリックは教師の指導力向上を図るためにも必要だと強調する。

「生徒の成長を促すためには、教師が生徒の変化について具体的なイメージを持つことが重要です。どのような言動が見られると、生徒が主体性を発揮したと言えるのかを、ルーブリックで客観的に評価していけば、生徒の力を伸ばすためにどのようなアドバイスすべきなのか、教師は考えを深められるでしょう。生徒の状況を客観的に把握し、指導改善に役立てることができるよう、ルーブリックの活用を進めていきたいと考えています」

ICT環境の整備を進め、生徒の主体的学習への支援強化を目指す

指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。

ALを推進する中で、他教科・科目で学習した知識・技能を活用して考えたり、堂々と考えを発表したりする生徒が目立つようになり、学習意欲の高まりがうかがえる。知的好奇心を刺激され、目を輝かせて学習する生徒の存在は、前述した通りだ。また、ALの取り組みは充実し、率先してルーブリックを活用する教師も増えている。18年度のALの推進について、研究主任の伊丹優先生はこう話す。

「授業公開にとどまらず、ALの視点を重視した研究授業に取り組みたいと思っています。そうして、生徒が何を身につけたのかを見取り、今後どのような授業展開が可能なか、追究していく必要性を感じています」

ICT環境の整備も、今後の目標の1つだ。全校のWiFi化、1人1台のタブレット配備を進め、eポートフォリオの構築を目指す。そうして、ICTを活用した反転授業やPBL(*3)を始め、学習と指導の「質」のさらなる向上を目指す。三林教頭は、今後をこう語る。

『見える化』が容易な点もICTのメリットです。例えば、家庭学習の記録をグラフ化して示せば、紙の記録とは異なる新たな意欲を、生徒に喚起できるようになるでしょう。また、ルーブリックも、生徒の成長を見取る『ものさし』として、さらに充実させていく予定です。そうしたツールの活用を推進し、生徒の主体的な学習意欲を伸ばせるよう、指導改善を続けていきたいと考えています」

*3 「Problem Based Learning」もしくは「Project Based Learning」の略称。問題解決型学習。